

日本レジャー・レクリエーション学会

第34回学会大会の開催にあたって

日本レジャー・レクリエーション学会
会長 油井正昭

平成16年度第34回日本レジャー・レクリエーション学会大会を、伝統の有る立教大学池袋キャンパスで開催することになり、便宜を与えていただいた立教大学をはじめ、大会準備にあたった諸氏に心から御礼申し上げたい。

第34回学会大会の準備は、今年度早々にスタートさせた。通常、学会大会に向けて実質的な準備は、大会会場になる大学やその地域におられる学会員を中心に、大会実行委員会が設置されて行われることが多いが、今年度の大会会場は学会事務局を置く立教大学であることや、学会準備にできるだけ多くの人が参加して行う方法として、立教大学に在籍する学会員を中心に、常任理事全員が実質の大会実行委員会をつくり、準備を推進する方法をとった。

大会実行委員会設置と同時に、実行委員は一人一役を受け持つことを決め、その具体として実行委員は「エクスカージョンなどの地域研究プログラムを検討する渉外部会」、「大会のP.R.関係を受け持つ広報部会」、「大会テーマをはじめ、基調講演、シンポジウムなどのプログラムを担当する研究部会」、「大会準備の調整や事務的事項をまとめる総務部会」の4グループに分かれ、精力的に各部会で検討が行なわれた。各部会での検討結果は、さらに実行委員会で検討を加え、その成果を常任理事会で審議して作りあげたのが今回の大会プログラムである。

こうして、大会メインテーマに「21世紀グローバル社会に向けた学会発展のビジョンと戦略を考える」が設定され、このテーマのもとで特別講演、基調講演、パネルディスカッションの企画が整った。また、地域研究では、開催地東京のレジャー・レクリエーションから見た特性を歴史軸で取り上げ、「都市レジャーの今昔」というテーマで、最近話題性が高い六本木ヒルズと、東京の前身である江戸のレジャーの様子を知ることができる、江戸東京博物館を訪れるプログラムが用意された。

学会大会の内容を基調講演、総会、研究発表などの室内プログラムに加え、大会会場の大学キャンパスや開催地のレジャー・レクリエーションから見た特性を研修できる企画をプログラムに盛り込むことが第31回学会大会から試みられてきた。今回は大会第1日目に地域研究プログラムが生まれ、東京のレジャー今昔を見聞しながら、現地で会員が意見交換を行うことができることは大変意義が大きく、学会大会参加の魅力づくりの一環と捉えたい。

今後も学会大会に多くの会員が魅力を感じて参加できるように、工夫を重ねていくことが大切と考えている。